

【答えのない問い】

愛と食でつながる日本とパラグアイ

【実践者】

氏 名	河上 智子	学校名	埼玉県川越市立川越第一小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	4年4組（28名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2024年11月～12月（6時間）		

実施概要

01 実践する教科・領域

社会 道徳

02 単元名と単元目標

単元名：愛と食でつながる日本とパラグアイ

単元目標：

- ・パラグアイという国について知り、日本と食で繋がっていることを知ることができる。
- ・食べ物がどこから来ているのか調べることで、世界と日本の繋がりについて知る。また、食品廃棄の現状を知り、自分たちにできることは何か考えることができる。

関連する学習指導要領上の目標：

<社会科>

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。

- 1 地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚をもつようにする。
- 2 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。
- 3 地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。

<道徳> 内容 C 国際理解、国際親善

他国の人々や文化に親しみ、関心を持つこと。

03 単元の評価規準

① 知識・技能	パラグアイのことを知り、パラグアイに暮らす人とその人たちが大切にしている文化や価値観があることを理解している。
---------	---

② 思考・判断・表現	国際理解や多文化共生について、学習したことから自らの考えへの根拠を見いだしている。また、活動を通して学んだ自分からの思い、学びによる自己の変容等、自分の考えをまとめ表現している。
③ 主体的に学習に取り組む態度	国や地域の異なる文化や価値観を受け入れ、尊重するとともに、共通性を見いだそうとするよさを取り入れようとしている。

04 単元設定の理由・単元の意義

〈児童/生徒観〉

児童は、川越の観光地のすぐ側に住んでいて登下校時に外国人観光客をよく見かける環境にいる。3年生から始まった、外国語の授業は楽しみながら言語に触れていてAETにも積極的にコミュニケーションをとる姿も見られる。しかし、他国について名前は知っていて文化や生活にとっても興味はあるが、どのような国なのかまだまだ知らないことが多い。

〈指導観〉

グローバル化が進み、各国との行き来や交流が便利になっている。また、身の回りを見てみると、他国から輸入している物も多数見られる。この単元では、パラグアイという国について、日本とパラグアイのつながり、関係を日系社会の話から入り、食でつながりがあることを知ってもらいたい。そこから、食品廃棄について知り未来の自分たちに何ができるのか考えさせたい。また、これからのグローバル化社会を生きる子ども達に日本だけでなく地球全体を一つとして見て、世界とのつながりに関心をもつ態度を育てていきたい。

05 単元計画（全6時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動
1	海外と日本のに ている共通点を みつけよう	日本と他国の共通点を見つけることを通して他国に親しみを持とうとする態度を養う	・＜道徳「つながっている日本と外国」＞ 道徳の資料を読み、自分と外国とのつながりについて考えを深める
	資料・教材など	Gakken みんなの道徳4「つながっている日本と外国」	
2	パラグアイにつ いて知ろう	パラグアイの様子について知ることができる。	＜パラグアイの様子について知る＞ ・パラグアイの町の様子 ・学校の様子 ・言葉 など
	資料・教材など	写真・ワークシート	
3 本時	身近な食べ物は どこから来てい る？	身近な食べ物はどこから来ているのか知り、自分たちの生活が世界と繋がっていることを知ることができる。	＜身近な食べ物はどこから来ているのか知る＞ ・朝食を例に挙げて、朝食が完成するまでのどの国の人々が関わっているのか調べる。 ・気づいたことを伝え合う
	資料・教材など	写真・ワークシート	

4	パラグアイと日本のつながりを知ろう。	日本とパラグアイの大豆とゴマを比較し、作り手の日本とのつながりを継承したいという思いに気づくことができる。	<パラグアイの農業や日系人について知る> ・大豆とゴマを見せ、日本のものと比べる ・日系人について知る。 ・作り手の願いを知る。
	資料・教材など 写真・醤油・ワークシート		
5	食品ロスや飢餓について知る。	日本や世界の食に対する課題を知ることができる。	<食品ロスや飢餓について知る> ・食品ロスや飢餓について知る ・給食の残りについて調べる ・気づいたことを伝え合う。
	資料・教材など 写真・ワークシート		
6	自分たちにできることを考えよう。	食品ロスや飢餓のために自分たちは何ができるのか考える。	<未来のために自分たちは何ができるのか考える> ・これから自分たちに何ができるのか、話し合う。 ・今までの学習のまとめ
	資料・教材など 写真・ワークシート		

06 本時の展開（3 時間目）

本時のねらい：身近な食べ物は、どこから来ているのか知り、多くのものが外国からやってきていることを知ることができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）
導入 (5分)	1 前時のふりかえり T:前回はどんな国について学習しましたか C：パラグアイ T:どこにありますか C：アメリカの近く、ブラジルの近く、日本から遠い T:日本と似ているところがありますか C：国旗、緑が多い、バスが走っているところ 2 パラグアイのスーパーの様子 T:この写真はパラグアイのスーパーの様子です C：野菜がそのまま置いてある、日本と売っている物が似ている	○写真を見せながら、日本と同じ食べ物があることに気づかせる。
	3 めあての確認 身近な食べ物は、どこから来てどんな国の人が関わっているのだろうか	○学習の見通しをもたせる
展開 (30分)	4 朝食が完成するまでに、どんな（国の）人が関わっているのか考える T:普段どのような朝食を食べていますか。	○同じ資料を読み合うグループを作り、資料を読む

07 板書計画

めあて	身近な食べ物は、どこから来てどんな国の人が関わっているのだろうか		
予想	各グループの考え		
・アメリカ ・中国 ・オーストラリア ・カナダ ・海外の物が多い のではないかな ・野菜は日本の物 が多いかも			
まとめ			
日本は、様々な国から食べ物を輸入している。また、様々な国の人が関わっている。			

08 評価規準に基づく本時の評価方法

ワークシート・発言・話し合い

09 学校外との連携（※該当のある場合）

なし

10 学びの軌跡（※児童生徒の発言の変化など）

児童は当初「知っている国はありますか」という質問に対して「アメリカ」「中国」「韓国」などと積極的に国の名前を言っていた。しかし「アメリカの有名な物は知っていますか」と聞くと「わからない」「国の名前を知っているだけ」と答えていた。

そのような中で、パラグアイの場所・町の様子・学校などの写真を見せ話していくと「こんなに海外の国についてじっくり見たのは初めて」という発言があり、日本と似ているところや違うところを進んで探し始めるようになった。また、「なぜ」「どうして」という疑問も持つようになっていった。

身近な食べ物が、どのような国から来ているのかについて学習した際は、「海外に頼っている」「野菜は、日本も多いから日本の物ではないか」という予想を立てていた。資料を読み込んでいくことで具体的にどの国から来ているのか、そして日本で育てている鶏なども餌は海外の物を使っていることなどを知ることができた。また、振り返りを見てみると「他の食べ物がどの国から調べてみたい」「スーパーでどの国から来ているか見てみる」と身近な物がどこから来ているのか、知ろうとする態度も見られた。

パラグアイと日本の繋がりについて、日系社会の話をしていくと児童はパラグアイの事を知らなかったけれども、パラグアイに日本のルーツをもつ人々がいることに驚いていた。そして、自分たちは海外について名前しか知らず国のことを深く知らなかったと振り返っていた。

食品ロスや飢餓について、日本の食品ロスについて大量の食品が捨てられている動画を児童達に見せた。思っている以上に多いこと、に驚いていた。また、飢餓について世界でこのような問題があることにも驚き、「このままではよくない」「何かできることはないのか」と解決策を考えようとする姿が見られた。各自、自分たちでできることを考えていった。

最後の振り返りを見てみると「海外の事は知っている気になっていた。パラグアイのことや他の国をもっと知りたい。」「飢餓や食品ロスについて、自分たちができることは小さなことかもしれないが続けていくこと、考えることが大切」と記述していた。海外について、より深く知ろうとしましたこの先の未来について考えていく児童の変容が見られた。

11 海外研修で何を学び、どの部分を児童生徒に伝えようと思ったか

海外研修で、パラグアイで働く日本の方や日系の方の言葉や姿が印象的でした。MIDORI 工房では、主宰の立川さんが、森林伐採が問題視されている中でパロサントという端材が破棄されていることに着目して食器などの制作をしていた。自身の工房の発展だけでなく、パラグアイの地位向上のために自分たちの持っている知識や技術の普及も行っていた。萩原工業では、バルチップという製品や環境への配慮の話を聞くことができた。その中で、パラグアイは「Amigo」という相手を大切にす文化を知り、萩原さん自身もパラグアイの文化を尊重し従業員の方その家族を大切にす思いを聞き、従業員の方も萩原さんを信頼し笑顔で仕事をしている姿を見ることができた。この2人の日本人の話を聞き、こんなにパラグアイのことを大切にする日本人がいること。そしてなぜ大切にするのか、児童に伝えたいと思った。

また、パラグアイに長く住む日系の方は、どのような思いで生活しているのか大変興味深くなってきた。日系社会では、日系2世の大豆などの大規模農場の経営者大西ホルヘさんの話が印象に残った。収穫された大豆は、ブラジルなどへ輸出しているが日本へ輸出するために少量栽培していた。日本への輸出費や厳しい検査があるのになぜ作っているのかという疑問に対して「1世からの日本とのつながりを継承したい。また将来の日本の食料危機が来た時に備えて」と話していた。また、東日本大震災際に豆腐の支援を行っていたという。その話を聞いて、児童に、パラグアイでずっと育った日系の方が遠い日本の事を思っていることを伝え、身近な食べ物がどこから来ているのか、その食べ物を大切にしているか・世界で起きている飢餓の問題について考えさせたいと感じた。

12 苦労した点

実際に行っていない児童に、パラグアイのことをどのように伝えていくのか、びっくり体験にならないためにはどうしたらいいのか、4年生の発達段階に合わせてどのように授業を導入していくか考えることに苦労した。また、食との関連で食品ロスや飢餓について触れていったが、食料に困ったことのない児童にどのように自分事として捉え考えることができるのか、児童が自ら考えていくためのアプローチの仕方がとても難しかったと感じる。

13 改善点

・本時の授業では、児童の実態に合った資料の選定を行う必要があった。今回は、児童が習っていない漢字もあり分析に時間がかかっていた。また、各グループの発表を行う際も他のグループの意見と関連させ、児童の言葉をつないでいく必要があった。

・食品ロスや飢餓については、説明や映像で授業を進めていったが、SDGsについてももう少し詳しく学習し関連させながら考える必要があった。また、自分たちにできることについて考えていったが、家庭や学校で実践し振り返る取り組みを入れたらよかったと思う。

・栄養士、教師海外研修の同じテーマ先生のクラスとつながるなど他者を巻き込んで行うことで、児童の理解も深まったのではないかなと思う。

14 成果が出た点

- ・地図帳を見るたびに「パラグアイ見つけた!」「パラグアイの近くにはブラジルやアルゼンチンがあると話す姿が見られた。また「アメリカの学校はどんな様子だろう」「中国の町の様子を知りたいな」「この前スーパーでオーストラリアの物が売っていた」と海外のことを深く知ろうとする姿が見られた。
- ・本校は、観光地の近くにあり外国人観光客も多い。その人たちと交流して川越や日本のよさを知ってほしいという願いをもつ児童が出てきた。
- ・SDGsの他の項目について知り、自分たちにできることはもっとないのか意欲的な姿が見られた。

15 自由記述

年度当初、児童には「何かこの1年1つでもいいから挑戦しよう」と話しています。挑戦を恐れず一歩踏み出すことで、自分自身の成長や様々な感動を得ることができると自分の経験から感じているからです。今回の教師海外研修の参加は、子ども達を世界につなげる窓口になりたい。子ども達に生きた国際理解教育をしたいという挑戦からでした。

パラグアイでは、たくさんの人々との出会い、経験、話を聞くことができました。また、自分の中で出た思いやもやもやを、毎晩一緒に参加した先生方と振り返り、新たな視点や共感を得ることができました。自分の考えの変化や新たな視点は本当に、楽しくて時間があっという間にすぎ「もっと話したかったな」と感じ隙間時間を見つけては、先生方ともやもやを共有する時間をつくりました。自分の考えを言語化し他者と共有することの大切さを実感することができました。

今年の授業は終わりましたが、今年だけではなく、この先も海外研修で学んだことを児童に伝えていきたいと思います。今回このような素晴らしい研修の機会を与えていただいたJICAの皆様・一緒に参加した先生方・パラグアイの人達・本校の職員・家族に感謝しています。